OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	嶋田厚・津金澤聰廣編,西村美香解説『復刻版・プレスアルト第1号～第73号』柏書房1996全3巻・CD-ROM版
Author(s)	鈴木, 佳子
Citation	デザイン理論. 1996, 35, p. 118-119
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/52966
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

嶋田厚・津金澤聰廣編，西村美香解説『復刻版・プレスアルト第1号〜第73号』

柏書房　1996　全3巻・CD-ROM版

鈴木佳子／京都市立芸術大学

1937年（昭和12年）京都で発刊された宣伝広告と印刷物の研究雑誌「プレスアルト」は長い間私たちが忘れかけていた戦時期の日本の印刷物，発行物の貴重な資料であり，今回復刻されたことは大きな意味を持つものと考えられる。

2年ほど前に，この本の解説を書いてられる西村美香氏の研究発表を聞いたとき，この雑誌の存在は知ってはいてもどこで，どうして全巻を見ることが出来るか，ほとんどの人は知らなかったと思われる。西村氏の解説から論旨をとるとプレスアルト研究会は脇清吉氏（1902〜1966年）の発案で創立された研究会で，広告印刷物の実物を頒布する会で，その広告印刷物に対する研究・批評を京都高等工芸学校（現　京都工芸繊維大学）の図案科教授，本野精吾・霜鳥之彦・向井寛三郎の3氏が後援すると言う形で発足した。

その当時の印刷物の現物とそれらのデザイナー・制作者によるコメントやその批評を掲載した月刊誌「プレスアルト」をセットにして会員に頒布するという研究会組織であった。（プレスアルトとは「印刷美術」を意味するエスペラント語で本野氏命名）との紹介文をよんで，その当時の印刷物（本書ではCD-ROMに収められた物）を見ると，往時の印刷美術というか，印刷の技術や広告の考え方と現代のデザインとの共通点・相違点がまことによく解る。印刷物は3色〜9色のグラビア印刷（1929年わが国に初めて原色グラビア印刷が紹介された）その他で手描きの原稿がほとんど，色は手描き分版，やっと白黒の写真とその人着（人工着色のこと）が登場する頃なので，版画的おもしろさは現在よりあるといえるかもしれない。

例えば，第2年15号に印刷美術座談会の特輯号がある。その中の写真製版についての箇所で脇さんが，写真版がどうも，うまくないと云ふことを聞きますけれど——と言う問いに対して，写真版印刷所の方が写真の最初の原稿の選択が誤っているのではないか，写真の原板を出されるのはいいが，原板はなかなか出ないし，また焼き付けた原稿を縮版するのはいいが，拡大製版するのは仕上がりが悪いと言い切っている。写真を焼き付ける銅板の厚さにも言及し，仕上げの時間を急ぎすぎるのも悪い出来上がりの原因だと云っている——原稿を出す人と製版技術者とのコミュニケーションの問題とも云われている。それはとりもなおさず現代の抱えている問題と非常に似ていて思わずおかしくなった。現在も技術革新のまっただの中にいるためＤＴＰでの原稿出しに苦慮している私たちにとって，昔も同じだったのだと思った。本書を時代を追って読んでいくと本当にその時代の証と云うか，現実が生きていて読み物としても面白く，研究書であり，時代の証人として生きている。一例として，国家活動に対する宣伝の重要性を求めた日本宣伝文化協会設立の趣意書は，この時代の重要な証言であると思う。

印刷美術という研究会やその機関誌で戦時中生き残り発刊をし続けた事は，脇氏の長い時間をかけた信頼関係とその粘り強い働きのおかげであった。他の同様の雑誌「広告界」や「印刷と広告」も戦時体制の規制の下に廃刊へと追い込まれている。印刷所の実状は本

書の中より拾ってみると，印刷方法というタイトルで（昭和17年）プレスアルト51号，グラビア印刷は油性インキから水性インクに変わり印刷を続けることが出来たが，オフセット印刷の方は石油ガソリンが配給停止になったので，一度インクを機械にセットすると，もうローラーが洗えないので色を変えることが出来ないだけでなく，インクを落として印刷機を止めることも出来ない状態になった。と言うことが報告されている。これに続くプレスアルト54号（昭和17年4月号）に日本出版文化協会　発表試案として「活字規格統一と使用制限」という記事が載っている，丁度私も書体について，いろいろ調べている内に，日本語の書体が戦時中に少しの書体数になり，戦後活字文化の中で古い時代の活字との断絶の仕方が何とも言えぬ状態なのはなぜか？と非常に気になっていたので，（一端は印刷学会誌の印刷雑誌には書かれていたが――）その記事が目に留まった。活字使用制限として――一般書籍雑誌の組版及び使用活字の規格化其他印刷に関する試案として

1．使用活字の書体制限

イ．明朝（清朝・宋朝・楷書等を廃す）

ロ．角ゴジック・アンチック（丸ゴジックを廃す）

2．読者の年齢別組版及び使用活字の制限

イ．満7歳まで　活字の大きさ
4.5号以上
（現存活字12 pt）ママ
行間
4.5号全角以上

ロ．満9歳前後　活字の大きさ
5号以上
（現存活字10.5 pt）ママ
行間
5号全角以上

ハ．満10歳以上（一般及び青少年）
活字の大きさ
5.5号以上
（現存活字9 pt）ママ
行間
5号2分以上

その他活字の込物の統一，活字の高さ制限，鋳造及び字母の統一，等資材の節約に重点を置き印刷文化の為と云いながら，あらゆる制限を設けて美しさとは関係のない統一を求めている。活字の種類は極端に少なくなり，素材を悪くした活字でもって印刷される羽目に陥った。

軍国主義一色に染まっていた時代にデザイナーは何を考えていたのか――それらのテーマに対してもある答えを出してくれているのかも知れない。宣伝活動，民衆動員，（ナチスの宣伝活動など――）過ぎてきた時代のことは，何とでも言えても，これから私たちは時代の要請とは言え，多量の印刷物というごみを創っているのではなく，コミュニケーションの手段として大切にしかも自分の主義主張を忘れることなく制作して行くことの大切さを教えられました。いろいろの年齢の方々に読んでいただきたい資料だと思います。時代の証人のような資料を創られた脇清吉氏と協力者達，その資料を今日まで守ってこられた脇とうほ氏に感謝する思いです。